

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【蓮沼小学校】

学力向上 アクションマップ

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する 資質・能力	(1) 根拠を明確にしなが、自分の考えを伝えることができる資質・能力 (2) 自らの学習を調整することができる資質・能力
↓	
実施する学力向上策 【時期・頻度】	(1)「協働的な学び」の視点：思考のプロセスを言語化する場の設定 ・「筋道を立てて結論を導く」力を育成するために、グループで話し合い、期末上で1つの結論にまとめるような協働的な場面を設定する。 ・基礎学習は個別(端末)で効率的に進める。 (2)「個別最適な学び」の視点：つまづきの可視化と自己調整学習 ・GWSやスクールデジタルボードの振り返りを活用し「自分ごとでつまづいているのか」を児童自身がデータから気づくための時間の設定(単元に2回) ・授業の振り返りを生かし、児童自身が学習内容を適切に自己調整できる時間を単元の中に設定する。(単元に2回)

⑤	年度末評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握)
↓		
今年度の成果と 次年度の課題		児童生徒の 学力の向上

②	全国学力・学習状況調査結果の分析	
特徴的な結果		①調査結果の振り返り(4月) ②調査問題の解説
↓		
結果から考えられる 児童生徒の実態		①学校全体での取組 ②単元テスト・定期テスト等の分析・活用 ③調査問題を活用した授業

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

④	さいたま市学習状況調査結果の分析	
特徴的な結果		①学校全体での取組 ②単元テスト・定期テスト等の分析・活用 ③中間評価を経ての取組 ④調査結果を活用した授業
↓		
結果から考えられる 児童生徒の実態		

③	中間評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	学力向上策の 見直し
↓		
学力向上策の 見直し		

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【蓮沼小学校】

⑥ 次年度への課題と学力向上策	
知識・技能	国語では、漢字の定着や文構造の理解に課題があるため、前学年の学習内容を定期的に振り返る時間を設け、文章読解に必要な語彙や表現を整理し、日常的な文章活用の場で基礎基本の定着を図る。算数では、計算技能や数的処理の正確さにはばつきがあるため、反復練習と個別支援を組み合わせる。また、文章での説明や単位量あたりの考え方を活用して課題解決する学習を取り入れ、基礎技能と応用力を向上させる。社会では、資料読解や用語理解を強化するため、授業内で実践的演習や確認テストを行い、資料活用の基礎技能の定着を図る。理科では、電気など「エネルギー」領域の概念理解を深めるため、日常生活と結びつけた実験や観察の機会を増やし、概念理解と用語定着を徹底する。
思考・判断・表現	国語では、文章の条件や目的に応じて情報を整理し、根拠を明確に自分の考えを表現する力を伸ばすため、条件設定を工夫した記述問題や文章読解を継続する。また、ICTやペア・グループ活動を活用し、多様な思考を広げる指導を進める。算数では、グラフや表から情報を読み取り、数量を関連付けて判断する力や、文章で理由を示して結論を導く力を育成するため、課題解決学習や説明演習を計画的に実施する。また、単位量あたりの考え方を活用した表現を定着させる演習も充実させる。社会では、資料に基づき因果関係や背景を考察する力を育成するため、資料読解と根拠提示の演習を授業内に組み込み、思考のプロセスを可視化して指導する。理科では、観察結果や実験結果を基に事象を関連付けて考察する力を育てるため、結果の整理や記録方法を示し、筋道を立てた結論の導き方を継続して指導する。

今年度の課題と学力向上策		
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語「読むこと」「書くこと」 算数「数と計算」「測定」「データの活用」 <指導上の課題> 個人差が大きい。漢字や計算が苦手な児童が多い。個に応じた指導を充実し、反復練習や振り返りの時間を確保する必要がある。	授業の最初に、前の時間の振り返りの時間を確保し、その学習を生かして、本時の課題に取り組むことができるようにする。その時間に学習したことを振り返る時間も確保し、定着できるようにする。【毎時間】 「学年・学級の時間」を設け、書き込み式のドリルやノート、ドリルパーク等を活用し、漢字や計算の反復練習の時間を確保する。【週に1度】 1人1台端末を効果的に活用し、児童主体の授業を行い、成果と課題を共有する。【週に1度】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語「読むこと」「書くこと」 算数「数と計算」「測定」「データの活用」 <指導上の課題> 個人差が大きい。個に応じた指導の時間を確保し、指導を充実させていく必要がある。	特に「読むこと」「書くこと」や算数の授業において、主体的・対話的で深い学びを実現するために、学びのポイント「じ・し・ゃ・く」を意識した授業を行う。【毎時間】 ICTを効果的に活用し、児童同士で考えを深めたり共有したりする場面を設定する。【毎時間】

<小6・中3>(4月~5月)

⑤ 評価(※) 学力向上策の実施状況	
知識・技能	B 授業の初めに前時の学習を振り返る時間を設け、内容を整理して本時の課題に主体的に取り組めるよう工夫してきた。振り返りにより、学習の関連を意識して授業に臨む姿が見られ、理解の定着に効果があった。また、「学年・学級の時間」では、書き込み式ドリルやノート、ドリルパーク等を活用し、漢字や計算など基礎学習の反復練習を継続的に行ったことで、児童の基礎技能の定着が図られた。さらに、1人1台端末を活用した授業では、児童が自分で課題に取り組む時間を確保し、解答や考えの過程を可視化することで、個々の理解度や把握や指導の改善につながった。授業内外での振り返りや自己評価を組み合わせ、学習内容の整理や定着に取り組むことも成果である。
思考・判断・表現	B 国語の「読むこと」「書くこと」や算数の「考える力」を育成するため、主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善に取り組んだ。学びのポイント「じ・し・ゃ・く」を活用し、課題を自分事として捉える力や友達との意見交換を通して多様な考えに気づく力が育ったことが成果である。授業ではICTを活用して意見を可視化し、児童同士が考えを比較・共有する場を設定したことで、表現力や論理的思考力の向上にもつながった。また、課題解決型学習やペア・グループでの討議を通して、自分の考えを根拠とともに述べ他者の考えを受け止める態度も育成できた。さらに、授業後の振り返りや教師間の情報共有により課題や改善点を整理し、次時の指導に生かす循環を確立した。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

② 全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語においては、「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文中で正しく使うことができる。」の正答率が昨年度より向上し、基礎的な漢字の定着が進んでいることが分かる。しかし、児童間の習熟度には差があり、十分定着していない児童もいるため、個々の理解度に応じた指導が今後必要である。算数では、「データの活用」や「測定」の分野での正答率が低く、昨年度の結果と同様の傾向であることから、学校全体の課題である。また「図形」の分野も正答率が低く、面積の求め方や図形の定義に関する理解が十分でないことが示されている。基礎的な計算力や概念理解の定着と、図形の特徴や関係性を多面的に捉える学習活動が求められる。理科では、「エネルギー」を柱とする領域で正答率が低く、特に電気や電磁石に関する理解が不十分であることが明らかである。日常生活の事象と結びつけた学習を通して理解を深める指導が必要である。
思考・判断・表現	国語では、「書くこと」「読むこと」においては、昨年度と大きな差は見られないが、問題の種類によって正答率に変動があることから、多様な文章や資料に触れる経験を増やすことが重要である。物語文・説明文・意見理解を要する文章など、異なる形式の文章に対応できる力を育てる必要がある。算数では、測定分野の定着が十分でないことが顕著である。また、数量の関係が変化する場面を適切に捉え、問題解決に結び付ける力を高める指導が求められる。具体的な場面設定や図・表を活用した問題解決型学習を取り入れることが有効であると考えられる。理科では、「生命を柱とする領域」で正答率が低く、事象の理由を説明する力が課題が見られる。特に、原因と結果の関係を論理的に捉え、他の事象と比較しながら理解を深める力が十分に育っていないことが分かる。このため、実験や観察の結果をもとに考えを整理し、文章や図・表などで表現する学習を取り入れることが必要である。身近な生物や生活の事象を題材に理解を深める工夫も重要である。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)
- ③分析共有(保護者・地域・実態把握)

④ さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、前学年までに相当された漢字を文中で正しく用いる設問において、市平均正答率を下回る学年が複数見られ、基礎的事項の定着に課題がある。また、主語と述語の関係を理解する設問において一部で市平均を下回っており、文構造の理解を含めた基礎基本の徹底が必要である。算数では、市平均を上回る学年もあるものの、「数と計算」領域において基礎的な計算技能の定着に課題が見られる。計算の正確さや処理の確実性にはばつきがあり、総合的な指導が求められる。社会では、資料を基に基礎的事象を読み取る設問で正答率が伸び悩んでいる。用語理解と資料読解が十分に結びついていない状況が見られ、資料活用の基礎技能の育成が必要である。理科では、「エネルギー」を柱とする領域、特に電気に関する設問で正答率が低い傾向が見られる。用語や現象の意味理解が十分とはいえず、日常生活と関連付けた指導を通して概念形成を図る必要がある。
思考・判断・表現	国語では、「読むこと」「書くこと」において市平均を下回る設問が見られる。文章の内容を的確に捉え、条件に応じて必要な情報を整理する力に課題がある。また、記述問題では、本文を根拠として自分の考えを筋道立てて書く力が十分とはいえない。目的を意識した読解と、根拠を明確にした記述の指導の充実が求められる。特に条件に沿って記述する力の育成が課題である。算数では、中学年の「測定」領域では成果が見られる一方、高学年の「データの活用」変化と関係に課題が見られる。グラフや表から情報を読み取り、数量を関連付けて判断する力に差がある。また、文章で説明する力や理由を明確に示す力も課題が見られる。筋道を立てて結論を導く力の育成が求められる。単位量あたりの考え方を活用した説明の充実も重要となる。社会では、資料を基に理由や背景を考察する設問で正答率が伸び悩んでいる。資料から読み取った事実を根拠として活用し、因果関係を踏まえて考える力の育成が課題となっている。理科では、実験や観察の結果を基に事象を関連付けて考察する設問に課題が見られる。結果を整理し、筋道を立てて結論を導く指導の充実が求められる。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	授業の最初に、前時の学習を振り返る時間を設け、内容を整理して本時の課題に主体的に取り組めるよう工夫してきた。振り返りにより、学習の関連を意識して授業に臨む姿が見られる。また、「学年・学級の時間」では、書き込み式のドリルやノート、ドリルパーク等を活用し、漢字や計算など基礎学習の反復練習を継続的に行った。短時間で集中する積み重ねにより、基礎学力の定着に効果が見られている。さらに、1人1台端末を活用し、児童主体の授業を進め、成果と課題を共有するようしている。ただし、学級間での実践の深まりには差があり、今後の課題である。	変更なし
思考・判断・表現	B	国語の「読むこと」「書くこと」や算数では、主体的・対話的で深い学びを実現するため、学びのポイント「じ・し・ゃ・く」を意識した授業を行っている。課題を自分事として捉え、友達とのやりとりを通して多様な考えに気づく姿が増え、思考の広がりや表現の工夫が見られることは顕著である。また、ICTを活用して意見を可視化し、児童同士が考えを深め共有する場を設定している。しかし、学級によって活用や主体的な程度に差があり、今後の指導工夫が課題である。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)